

ていく必要があります。その中で今回の私の仕事は、立ち上げ段階においてしっかりとその方向に向けたインフラ整備とユーザーからの信頼を獲得することを目的としていました。どれだけの力になれたかは分かりませんが、今後さらに新工作室がユーザーに受け入れ、最先端の工作室として軌道に乗っていくことを切に願っています。

分子研での勤務に慣れ切っていた自分にとって、急に職場環境が変わるのは大変でした。特に出向先では宇宙機器開発が抱える情報セキュリティの厳しい制限や、自動化が進んだオンラインシステムでの事務手続きの扱いなど、なかなか馴染めず戸惑うことも多くありました。そのたびに先端工作技術グループのメンバーや科学推進部や調達課、施設課の方々にお世話になり、また、協力していただいて、何とか1年

無事使命を全うできたと思っています。とても多くの方々との出会い、支えられ、学んだ一年間でした。このような人事交流は個人の成長だけでなく分子研技術課の発展にもメリットがあり、技術課の多くの職員にこのような機会がめぐってくれば良いと思います。また、装置開発室では他機関からの実験機器

の設計・製作依頼も受け付けていますが、今回のように他機関に出向いて技術協力・技術指導をするという支援もあってもいいのではないかと思います。

最後になりましたが、出向するにあたり快く送り出していただいた川合所長、小杉先生、山本室長、装置開発室のメンバーに心から感謝いたします。



写真3 先端工作技術グループ。

覽古考新 12 | 1977年

自然の理法の深遠な考察が抽象学の進歩に貢献したように、生物の精妙なしくみのなかにこそ、化学の原理的な発展をもたらす要素がひめられているのではなからうか。もともと、生物のからだの中では、現代の化学の知識以上に化学が発達しているのは間違いないのであるから、人間のつくっていく化学がそれに学ばない法はないであろう。「生物学に学ぶ化学」という意味の“生化学”にもっと注意を向けるべきではなからうか。

細分化した学問分野の再統合によって一つの学問分野の飛躍的な展開が期待されるためには、単に複数の分野の重なりあった部分という意味での境界領域の研究では不十分で、むしろ全くかけはなれた分野同士による相互啓発が必要なのではないか。

.....

分子科学は、たしかにすべての物理的科学の基礎である。他分野は分子科学を土台にして発展すべきであるという自負は、分子科学者にとってたしかに必要である。その一方で、自然の理法、とくに生物や人間のからだの精妙なしくみのなかに、われわれ分子科学に携わるものに対して天啓のごとき閃めきを与えてくれる宝珠がかくされていると期待するならば、恵まれた環境のもとで、宝さがしをするのに躊躇しないことであろう。とくに次代を擔う方々に期待したい。

分子研レターズ No.3「学問における分化と統合」(1977年)
福井謙一(京都大学工学部教授) ※2018年は生誕100年